



たゆまめ
努力で
手に入れた
第十代横綱

やながわ
人物伝
7



うんりゅう ひさきち
雲龍久吉
(1822~1890)

雲龍久吉は、江戸時代の大相撲で活躍し、国技の大相撲の発展につくしました。また、横綱土俵入りの雲龍型を考案しました。



子供のころから村一番の力持ち

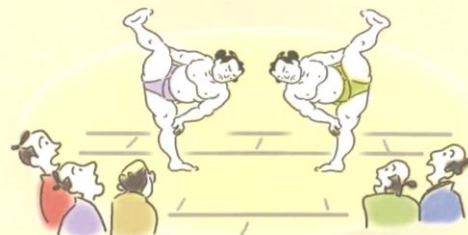
雲龍久吉は、一八二二(文政五)年、甲木(今の柳川市大和町)に生まれました。十代で両親と祖父を亡くした久吉は、幼い弟や妹の世話をするために働かなければなりません。久吉は人並みはずれて体が大きく、力がとても強かった。人の何倍も働きました。大人が五、六人かかっても動かすことができない大石を久吉は一人で軽々と運んだそうです。

久吉は二十歳になったとき、友人たちの勧めで、隣村の相撲大会に飛び入りで出場しました。しかし、久吉は相撲の技をなにひとつ知りません。そこで、相手をつかんでそのまま押し出しました。それを見ただれも久吉の力の強さにびっくりしました。それがきっかけで、久吉は大坂相撲の親方のもとで修行をすることになり、じきにデビューしました。相撲取り、雲龍久吉の誕生です。



柳川藩を助けるために座敷で相撲をとる

一八四七(弘化四)年、久吉は江戸相撲の四代・追手風喜太郎親方の部屋に移りました。久吉は一生懸命努力をしたので初土俵から勝ち続け、一八五七(安政四)年には六度目の優勝を果たして大関になりました。江戸にいても久吉はいつもふるさとの柳川のことを思っていました。そんな久吉を柳川藩主も大切に、藩のお抱え力士にしました。久吉は、柳川藩を救うために活躍したこともあります。借金を抱えて困っていた藩が大坂の商人からお金を借りられるように一肌脱いだのです。久吉は、藩が大坂の商人たちを招いて開いた贅沢な宴会の座敷に、ほかの力士たちと出て行って、しこそろい踏みしました。久吉たちを側で見た商人たちは大喜びし、一流の江戸の力士たちを集められる柳川藩は金持ちだと信じ込み、喜んでお金を貸したのです。



横綱になり、ふるさとで相撲興行をする

一八六一(文久元)年、四十歳になった久吉は、それまでの立派な成績が認められて、夢にまで見た横綱になりました。次の年久吉は、それまでお世話になったふるさとの人たちにお礼をするために、三日間、ふるさとの三柱神社の境内で、相撲大会を催しました。この日、境内は久吉を一目見ようとすると、いっぱいになりました。

ふるさとの人たちが見守るなか、横綱・雲龍久吉が土俵入りしました。この日のために新しく作られた化粧廻しは、柳川藩主の立花鑑寛から贈られたものでした。堂々とした体格の久吉が土俵に上がると、観客は立ち上がり、中には感激して泣き出す人までいたそうです。久吉の土俵入りのスタイルは「雲龍型」と呼ばれ、形の美しさから、大勢の横綱たちが土俵入りの型に選んでいます。こうして雲龍の名前は今も生き続けています。

